OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	LUIGI RICCOBINI の催涙喜劇擁護
Author(s)	末次, 義
Citation	Gallia. 1983, 21-22, p. 147-155
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

LUIGI RICCOBONIの催涙喜劇擁護

末　次　　義

Nivel de La Chaussée は催涙喜劇と蔑称される新しいジャンルの創始者[1]として18世紀フランス演劇史にその名を残している。この新しいジャンルの出現を促した要因として，ルイ14世の没後演劇をとりまく諸般の事情の変化のなかでも，特に演劇を国民的娯楽に成長させたフランス社会各層の質的変化——貴族社会の頽廃と町民階級の経済的向上——が従来の喜劇に対する要求を変えたとする見方が一般的である。形骸化した bienséance に縛られ活力を失った貴族階級と，第三身分の不公平さに不満を抱く町民階級とは，それぞれ別の根拠から共に sensibilité に対する欲求をもつ。わずかな美徳にも感動して涙を流す感傷的傾向に応える作品が観客の支持を得て大流行することになる。

17世紀末ルィ14世の寵姫マントノン夫人を愚弄した作品 *La Fausse Prude* を演じた廉により追放の浮目にあったイタリア劇団は，王の没後摂政オルレアン公フィリップによってパリに呼び戻される。[2] 座長 Luigi Riccoboni がモデーヌ公付図書係をつとめるDocteur Muratori に宛てた手紙[3]は，ほぼその全文が La Chaussée の発表した初期の三つの作品に関するもので，この新しいジャンルの誕生が一イタリア人俳優の目にどのように映ったかを知るには興味ある記録である。手紙の第一節で Riccoboni は当時の沈滞した演劇界にかすかな光明が差したことを次のように告げる。

> Dal canto mio non voglio trascurare l'occasione di darle una nuova Letteraria di Francia: in oggi non fà ella gran' rumore, e può dirsi che non è che un scintilla, ma forse in men' bi un' secolo può ella divenire un' gran' fiamma che per tutto risplenda.[4]

La Chaussée の初期の三作の初演は，*La Fausse Antipathie*（1733年10月），*Le Préjugé à la Mode*（1735年２月），*L'Ecole des Amis*（1737年２月）であり，上述の Riccoboni の手紙は1737年５月30日付であるから，爆発的人気を呼んだデビュー以来二年近くを経過しており，新ジャンルに対する数々の非難攻撃[5]にも拘らずもはや La Chaussée の劇壇における地位は確固としたものであった。Lansonによれば，La Chaussée は自尊心が病的に強く，少々のほめことばでは満足せず，己れの作品に加えられる批判に対してはあからさまに不満の色をあらわし，異常なまでの敵愾心を燃やしたという。[6]

彼はRiccoboniの讃辞にも満足できなかったとみえ，元の手紙を書き直させた上で翻訳[7]してもらったが，それでもまだ足りず，友人の Sablier に頼んで再に加筆を重ねたといわれる。しかも，この件について Sablier に宛てた手紙には，自作 *L'Ecole des Amis* を攻撃した L'abbé Desfontaines の《absurdité》を明らかにするためであって，なにも自分から頼んだことではないと強調することを忘れない。[8] 加筆されていない最初の手紙でさえこの論争に中立的な立場をとる人たちまで驚かせた[9]と伝えられることからも，Riccoboni の肩の入れようは相当なものであったことが窺われる。

もともと Riccoboni は伝統的喜劇には批判的であった。本国イタリアで彼はMartelli や Maffei らの書いた悲劇の上演には大成功を収めたが，喜劇に関しては（ここでいう喜劇とは筋書にもとずくコメディア・デラルテを指す）まじめな drame を指向したため，依然として bouffonnerie traditionnelle を期待する観客を退屈させて不評を蒙った。折よくオルレアン公の要請を受け，花形 Flaminia（本名 Helena Balletti, Riccoboni の妻）以下10数名の一座を引き連れてパリへ乗り込んできたのは，一つには年来の念願である新しい演劇——仮面と即興の劇を越えるもの——に再度挑戦する夢を抱いていたからであった。[10] コメディア・デラルテの殻を破ってレパトリーを新しくしようと願っていたRiccoboni が La Chaussée の創作態度に共感を覚えたのは当然のことであった。

> In questo mentre uno di quegli ingegni, che non sono ben frequenti fra questa Nazione e de' quali tanto abbisogna la Repubica delle Lettere, voglio dire, uno spirito amante della novità, ed assai corraggioso per intraprenderla contro il torrente della consuetudine del volgo, pensò di scuotere il giogo; tentò egli un' nuovo camino giache il calcato sin' ad ora, sul' imitatione de bravi Poeti di sopra citati, riusciva non dilettoso a spettatori. La persona di cui parlo è il Sig. *Nivelle de la Chaussée,* uno de i quaranta dell' Academia Francese.[11]

上に引用した一節も La Chaussée の華々しい登場を告げるものであるが，同時にRiccoboni は古典主義演劇の凋落をはっきりと認めている。18世紀演劇の特徴は「まじめさ」と「美徳の賞揚」であるが，イタリア劇団も La Chaussée の出現以前既に Delisle, Autreau, Allainval, Boissy らの感性に訴える作品を次々と演じ観客の好みの変化に対応していた。[12] もっとも Riccoboni もパリへ来た当座は伝統的なスペイン物やイタリア物を演じていた。1716年5月18日 Palais Royal でデビュー，次いで6月1日 Hôtel de Bourgogne に移って以後約60篇の演目がその年の記録に残っている。その大半はArlequin の登場する旧イタリア劇団のレパトリーからの借物で，これらが久々の登場とあってパリの観客を喜ばせた。[13] 新しいジャンルの開拓を目指す Riccoboni にとって，この状況は

期待外れであったようであるが，心ならずも novateur となる夢はひとまず先へ延ばしてArlequin 物を演じ続ける。やがてこれからも客足は遠のき，[14] フランス人観客にとってのイタリア語の難解さを大げさな身振りで補うことに限界を感じ，フランス語による劇をレパートリーに加えることによって不振の危機を乗り切ろうとする。イタリア劇団がフランス語を用いて演じた作品のうちで特筆されるものは，Jacques Autreau (1657—1745) がこの劇団のために書いた *Le Naufrage au Port-à-l'Anglais ou les Nouvelles Débarquées* (1718) である。[15] イタリア訛りのフランス語が観客に受けたものとみえ，そのシーズン中に10回も舞台にかけられている。[16] いずれにしても，Riccoboni の初期の目的——筋書の劇を性格劇にまで高めること——は依然として達成されず，遂に彼は1729年4月に隠退し，妻子をともなって一時イタリアへ帰ることになる。1731年再度パリへ戻ってくるが，一座の再編成は妻の Flaminia と息子の François にまかせて，彼自身は再び舞台に立つことはなく，1753年にこの世を去る。

前述の手紙は Riccoboni の隠退後パリ在住中に書かれたことになる。La Chaussée の出現に己れの果せなかった夢の実現を期待するところが大であったに違いない。《Ha egli imaginato un nuovo sistema di Comedia.》のくだりには，La Chaussée に対する共感と羨望とが窺われる。Riccoboni の目に映った新しいジャンルとはいかなるものか。

> In quella si trattarono sempre gli affari domestici de cittadini e de benestanti, o pure de mecanici operari delle cittâ: non abbiamo dal Teatro antico, cosi Greco che Latino, altri modelli che di questa natura, e che i moderni hanno imitati. Si trova però nella societâ una sorte di persone che sono excluse dal azione comica: i Gentil-uomini, ed i Signori di portata e d'illustre nascita sono creduti troppo grandi per trattare gli affari domestici, che sempre furono l'appanaggio de la Comedia: come ne pure possono aver loco nel Tragico, poiche sono troppo piccoli per calzare in coturno, in cui solo Principi di alto grado intervengano per grandi azioni. Di questi tali personnaggi, che occupano una nichia isolata e fraposta tra il primo rango de la Tragedia, e l'infima de la Comedia, ha pensato il Sig. *de la Chaussêe* di farne un'azione, che alcuna volta adegui l'interesse de la Tragedia, ed alcun' altra maneggi gli affari de la societâ civile fra gente di nobile conditione, e sostenga cosi le veci de la Comedia.[17]

古典主義の法則に従えば同時代のフランスにおける事件はすべて喜劇の対象ということになる。町民階級は言うに及ばず貴族王侯であっても喜劇のジャンルに入る (…… che sempre furono l'appanaggio de la Comedia)。彼らの悲劇的感情をあらわすにはどうす

ればよいか。18世紀の感性を旗印にする作家たちの提起した問題はここにある。町民階級の家庭にも古代の王侯貴族に劣らぬ悲劇が存在するというのである。上述の Riccoboni の意見はこれとは多少異なっている。即ち彼のいう《una sorte di persone che sono excluse dal azione comica》なる階級は，喜劇にはそぐわない高貴な生れの身分の高い階級ではあるが，古代の王侯英雄ではないために悲劇に登場し得ない貴族のことであって，決して広く一般町民階級を含むものではない。ただし，貴族にごく近い一部の上流町民階級は別である。Di questi tali personnaggi は Gentil-uomini ed i Signori di portata e dillustre nascita である。Riccoboni の激賞する La Chaussée の初期三作はいずれもこの線に沿って書かれている。[18] 他方構成の面では，韻文五幕[19]形式で書かれ，三単一の法則も時と場所の一致についてはほぼ守られている。このように形式的には伝統を守っているのは，Riccoboni のいうように観客に与えるショックを考慮したもの，[20] というよりは，むしろ喜劇の伝統的枠組まで改革する必要を感じていなかったのではないかと思われる。

第二作の *Le Préjugé à La Mode* を Riccoboni は《più che mai conobbero gli spettatori, che il *riso* ed il *pianto* potevano nobilmente comparir congiunti assieme in una azione comica…[21]》と評して，「笑い」と「涙」の融合を指摘しているが，「涙」こそあれ「笑い」は殆んど見られない。滑稽な場面といえば，わずかに主人公 Durval と彼の下僕 Henri との間に交される10数行のコミックなやりとりだけである。これにしても台詞の表現の上での外面的なものに止まっている。モリエールの主人公と下僕の醸し出す陽気さと滑稽さには程遠い。まったく La Chaussée には真の意味での喜劇作者としての才能はなかった。[23] しかしながら Riccoboni のいう《il riso》と《il pianto》の結合が，悲劇的な題材を喜劇の枠組の中で展開することを意味しているのならば，これこそ La Chaussée の意図したことであり，観客の喝采を浴びて成功したかに見えたものの，やがて衰退の道を辿らざるを得ぬ致命的欠陥でもあった。

手紙の主要な目的は，そのフランス語訳に *Lettre sur la Comedie de L'Ecole des Amis* とあるように，第三作 *L'Ecole des Amis* の発表以後日を追って増え続ける数々の批判に対する Riccoboni の La Chaussée 擁護である。《En général, les gens de lettres n'attiraient pas La Chaussée; la vivacité de son amour-propre l'éloignait d'eux, et eux de lui[24].》は La Chaussée の当時の文人・批評家たちとの対立を伝えている。勿論 Bouhier, l'abbé Leblanc といった La Chaussée に好意的な人たちもなくはなかったが，前者についてはその賛意をかちとるための手段が，《Ce manège n'était pas désintéressé[25].》であったり，後者に至っては，自分を追い越してアカデミー会員になってしまった La Chaussée に取り入ろうとする諂いともとれなくはない。自己愛の異常なまでの強さは遂には賞讃の中にさえも批判攻撃の影を見て取る一種の被害妄想に進行する。しかも己れを認めさせようとする陰湿な手段はこれすべて正しく無私無欲であると信じ公言しているのであるから仕末が悪い。Riccoboni の手紙に満足できなかった

のも当然のことといえよう。友人 Sablier による訂正加筆が事実であったとすれば，それは *L'Ecole des Amis* 批判に対する反論が展開される手紙の後半部分においてであろうと考えられる。

> In somma *la Scuola degli Amici* ha riuscito: è stata representata con gran' concorso, ascoltata con applauso; e pure è stata ella ogni giorno sommamente criticata, solo perche era provenuto il Publico contro una tale novitâ. Imputano a questa Comedia di mancar ella di alcune cose, che se per accidente vi fossero, sarebbero diffetti: dicono sopra tutto che *non vi è Comedia, e che non vi si ride*.[26]

「喜劇ではない，笑いがない」という批判を Riccoboni は（恐らく La Chaussée 自身は）《Una tale espressione significa, cioè, che manca d'intreccio e di moto》と受け取り，intreccio (intrigue) と moto (mouvement) はこの作品に見られないどころか多過ぎて，raisonable なものにするためにはそれらを縮少するか切り捨てなければならないだろうという。町民の家庭生活（ただしこの作品では貴族の私生活）を扱う現実的な筋の展開が La Chaussée の当初の意図であったはずにも拘らず，でき上ったものは徹底的に物語的である。筋が平凡に流れるのを避け観客の興味を外らさぬために，「異常な意想外のシチュエーション[27]」を積み重ねて意外性に頼る。このように現実にはあまりありそうもない作り事を寄せ集めたものが，筋の単一を要求する古典主義的規準から見て raisonable な喜劇であるわけはなく，「喜劇ではない」という批判は，それはそのままで「新しいジャンル」に属することの証明にもなっている。

「笑いがない」という指摘については，Riccoboni は《… se non si ride, ben fatto, poiche sarebbe il riso il velen' di una tal' favola.》と反論し，今や感傷的催涙を至上の目的とするこの種の新しいジャンルにとって笑いは有害であり，ないほうがましであるという。確かに *L'Ecole des Amis* には笑いはない。町民階級の悲劇を伝統的喜劇の枠の中で書き，その枠組をほぼ忠実に守りはしたが，初めからいわゆる喜劇など書く積りのなかった La Chaussée に笑いを求めるのは筋違いであろう。《Oui, ce genre de comédies sérieuses, sublimes même et pathétiques, qu'on pourrait nommer des tragédies bourgeoises, ne passe plus aujourd'hui que pour du haut comique.[28]》La Chaussée の作品に批判的であった L'abbé Desfontaines も，「まじめな喜劇」という新しいジャンルが *L'Ecole des Amis* によって確立されたと上述のように認めてはいるが，やはりそれは喜劇としてではなく，コルネイユの崇高さに通ずる「町民悲劇」とでも名付け得るとし，更に《C'est dommage que ce ne soit pas une tragédie!》と評していることから見ても，結末こそ喜劇の枠に従ってハッピーエンドとなっているが明らかに

新しい型の悲劇であるということができる。

> Circa il *riso,* volesse il cielo che se ne perdesse l'usanza in Teatro! Parlo di quel' sregolato riso che addimandano il più delle volte gli spettatori, e che la società civile[29](per non dir' di più) tanto condanna.[30]

極度に洗練され儀礼化した社交生活を送る18世紀の honnêtes hommes にとって前世紀以来のモリエール風喜劇の笑いは粗野で悪趣味と映った。既にマリヴォーの繊細な美意識と精緻な感情分析が生み出した一連の作品は，伝統的即興にもとずくイタリア物——粗野な笑い——が飽きられた後の Riccoboni 一座によってほぼ独占的に上演されている。「粗野な笑い」から「繊細な滑稽さ」への笑いの変化は，まさしく Riccoboni 一座のレパトリーの変遷と轍を一にしている。しかしながら上に引用した手紙の文面から依然として喜劇に sregolato (immodéré) な笑いを求める一般観客の存在することが分る。モリエールが信頼した平土間の客[31]の後裔はもっと自由な笑いを求めて縁日芝居の comédie à vaudevilles に打ち興じ，やがて不振のイタリア劇団は L'Opéra-Comique に合併されることになる。

手紙は，長年人々の待ち望んだ新しい喜劇の創始者として La Chaussée は将来必ずや栄光の日を迎えるであろう，と結んで終っている。Riccoboni の期待に反し，一時隆盛をきわめたこのジャンルもまるで涙の乾くように消滅し後世顧みる者もない。とはいえ現実に町民階級にも悲劇的事件は存在したのであり，La Chaussée が町民階級の道徳も自然で合理的であるとして，社会的偏見のゆえにそれが認められないことから生ずる葛藤を舞台にのせ，不幸な身の上に涙し美徳への回帰を賞揚して「町民悲劇」に表現の場を与えたことは評価されるべきであろう。演劇の現場で座長として俳優として18世紀における喜劇の変質をつぶさに眺めた Riccoboni が時代の要求——感情への感溺——に敏感に反応せずにはいられないことは明らかであり，既にイタリア時代から夢に描いていた新しいジャンルへの道が，期せずして現れた La Chaussée によって切り開かれようとすることに共感を覚え，この称讃の手紙を書かせるに至ったと考えられる。

註

(1) *Théâtre du XVIII^e siècle,* Bibliothèque de la Pléiade, Introduction XVII: 《Mais la liberté d'allure de la *commedia dell'arte* convenait mal au style Maintenon, l'épouse du roi prit mal une *Fausse prude* représentée en 1697, et les Italiens furent chassés de Paris. Ils n'y revinrent qu'avec la

Régence. C'est en 1716 que s'installa la célèbre troupe de Lelio et Flaminia Riccoboni, de Silvia Benozzi et de l'arlequin Vincentini, dit Thomassin: troupe admirable qui joignait aux mérites habituels des Italiens——aptitude au mince, drôlerie des arlequinades et pantalonnades, art de l'improvisation——d'exceptionnelles qualités de grâce poétique, de finesse psychologique, de délicatasse dens l'expression des sentiments.〉

(2) Gustave Lanson, *Nivelle de la Chaussée et la comédie larmoyante,* p.81: La comédie est un genre intermédiare entre la comédie et la tragédie, qui introduit des personnages de condition privée, vertueux ou tout près de l'être, dans une action sérieuse, grave, parfois pathétique, et qui nous excite à la vertu en nous attendrissant sur ses infortunes et en nous faisant applaudir â son triomphe. La Chaussée en fut l'inventeur.〉ランソンの定義では la comédie larmoyante と le drame bourgeois は区別されていない。本質的な差異は両者の間には認められないとする。但し la comédie larmoyante は le drame bourgeois の初期の一形態であって, le drame historique とは厳密に区別する必要があると述べている。

(3) Lettera del Signor Luigi Riccoboni, al Signor' Dottor' Muratori, Bibliothecario del Serenissimo Duca di Modena, della Reale Societâ di Londra, à Paris, le 30 mai 1737, (Œuvres de Nivelle de la Chaussée, 5^{e} tome, P.191.)

(4) La Chaussée の全集第5巻に収録されたこの手紙は Floncel の協力によってフランス語訳がつけられている。

(5) Lanson, op. cit. p.81 sqq.

(6) Lanson, op. cit. p.17 sqq.

(7) 全集に収録されている翻訳者 M. Floncel の肩書は avocat en Parlement, Censeur Royal, Membre de l'Académie des Arcades de Rome, de celle des Apathistes de Florence, des Etrusques de Cortone, & de celle de Boulogne; ci-devant Secrétaire d'Etat de Principauté de Monaco, & depuis Premier Secrétaire des Affaires Etrangeres sous le Ministere de M. Amelot & de M. le Marquis d'Argenson となっている。

(8) ほかにも《Ce n'est point une défense mendiée.〉,《Je ne demande point d'éloge, ni aucune ostentation; au contraire rien que de sensé et de succint.〉などの自己弁護がみられる。

(9) Lanson, op. cit. p.18: Le panégyrique...qui choqua bien des gens impartiaux,...

(10) Gustave Attinger, *L'Esprit de La Commedia dell'Arte dans le théâtre*

français, p.324.

(11) Lettera, p.197

(12) Delisle, *Le Faucon* (1721); Autreau, *La Fille inquiète* (1723); Allainval, *L'Embarras des richesses* (1725); Boissy, *L'Impertinent malgré lui* (1729).

(13) G. Attinger, op. cit. p.325 sqq.:《*Arlequin voleur, prévot et juge; Arlequin feint vendeur de chansons, caisse d'oranges, lanterne et sage-femme; Arlequin feint guéridon, momie et chat; Arlequin astrologue, enfant, statue et perroquet.*》

(14) Attinger は不入りの原因をイタリア劇団の用いるイタリア語にあるとする。70年前初めてイタリア劇団がアルプスを越えて来た頃はイタリアといえばフランスにとっては文化的先進国であり，桟敷席の客はイタリア語の教師を連れて観劇する習慣があったほどであるが，Lelio の一座が来たときにはフランスも既に大世紀を経て国力も増大し，ヨーロッパにおけるフランス語の勢力も増していた。(Attinger, op. cit. p.327)

(15) *Théâtre du XVIII*^{e} *siècle,* p.1368, Notice pour Autreau:《*Le Naufrage au Port-à-l'Anglais* marque une étape décisive dans l'histoire de la troupe Riccoboni, installée à Paris depuis 1716. Il n'est que de lire le prologue pour être éclairé sur ce point: c'est la première pièce importante jouée par les Italiens en francais, ou du moins pour une grande part en francais.》プロローグに登場する Silvia の口からこの劇の大半がフランス語で演じられることが告げられる。後に出版された折には，劇中で歌われる歌といくつかの単発的な単語を除いて全てフランス語になっているが，Arlequin の独白や召使いたちの会話のある景については Italienne(イタリア語で) と但し書きがついていることから，これらの景は実際にはイタリア語が用いられたものと考えられる。従って正確には，フランス語，イタリア語，両語の混合といった三種類の景によって構成されている。

(16) Attinger, op. cit. p.337

(17) Lettera, p.197-199

(18) *La Fausse Antipathie* の登場人物の身分や地位は明らかでない。主人公の男女にはそれぞれ下僕と召使いがいること，舞台は女主人公が所有する田舎の別荘であることなどから上流町民階級かあるいは貴族であろうと思われる。第二作 *Le Préjugé à La Mode* 及び第三作 *L'Ecole des Amis* はいずれも貴族が主人公である。

(19) *La Fausse Antipathie* は三幕からなるが，前後にそれぞれプロローグとエピローグ (*La Critique de La Fausse Antipathie* がこれに当る) を従えていて，全体で五幕の感じを与えている。

(20) Lettera, p.201 :《Si vede che nella prima andò tentone e con ispavento,

temendo forse una generale rivolta de spettatori,...》

(21) Lettera, p.203.

(22) *Le Préjugé à La Mode*, Acte III, scène IX.

(23) Lanson, op.cit. p.136.

(24) Ibid., p.17.

(25) Ibid., p.16.

(26) Lettera, p.205.

(27) フランス文学講座４，演劇，p.281

(28) L'abbé Desfontaines, *Observations,* VIII, p.233 (Lanson, op., cit., p.148).

(29) Voltaire, *Le Café ou L'Ecossaise,* Préface: L'honnête homme y sourit de ce sourire de l'âme préférable au rire de la bouche.
Boileau, *Art poetique,* chant III, v.399-400:《Dans ce sac ridicule où Scapin s'enveloppe,/Je ne reconnais plus l'auteur du Misanthrope.》

(30) Lettera, p.213.

(31) Molière, *La critique de l'Ecole des femmes,* scène V:《...je me fierais assez à l'approbation du parterre,... (Dorante)》

(M. 40　京都産業大学教授)